

2019/04/14

「何が人を苦しめているのか」

■なぜ人はマイナス感情を抱くのか

怒り、嫉妬、憎しみ、不安を抱くと、人は「苦しい」と感じます。これらを「マイナス感情」と呼びますが、それは、誰もが抱く「怒り」という感情に象徴されます。ですから、人は、「怒り」によって苦しめられていると言えるでしょう。

なぜ人は「怒り」を覚えるのでしょうか。

最近、東名高速道路の一部区間の制限速度が 120 キロになりました。制限速度 100 キロの道路を時速 120 キロで走れば、多少罪責感を覚えますが、制限速度が 120 キロであれば同じ速度で走っても何の罪責感も感じません。

また、子どもが言うことを聞かないと言って腹を立てている親に対して、もし子どもが言うことを聞かなかつたら 1 万円もらえると法律を作ったら、少し怒りが収まるのではないのでしょうか。むしろ反抗されるたびに、ちょっと嬉しく思うかもしれません。

つまり、前提が変わると、同じことが起きても感情は一定にはならないのです。親が子どもに腹を立てるのは、「言うことを聞かない」という事実に対してではなく、「言うことを聞くべきだ」という思いが前提にあるからなのです。

聖書は次のように言っています。

「律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません。」

(ローマ 4:15)

「律法」とは、「〇〇でなければならない」という規定のことです。規定を変えると腹が立たなくなるということは、私たちが怒る原因は、律法にあるということです。

「怒り」は、神が私たちに命じておられる愛とは逆方向の運動です。つまり、「怒り」は神の命令に逆らうことであり「罪」です。この「罪」は律法によってもたらされます。

大切なことは、怒ってしまったら、自分が律法に仕えていることに気づくことです。「怒り」から解放されるためには、律法を手放す必要があるのです。

「私たちが肉にあったときは、律法による数々の罪の欲情が私たちのからだの中に働いていて、死のために実を結びました。しかし、今は、私たちは自分を捕えていた律法に対して死んだので、それから解放され、その結果、古い文字にはよらず、新しい御霊によって仕えているのです。」(ローマ 7:5-6)

「文字に仕える」とは律法に仕えるということで、私たちは御霊に仕えることによって、律法に死ぬことができます。御霊には自由があるからです。

■律法が罪なのか

私たちの罪の原因が律法にあるというなら、律法そのものが罪なのかという疑問が生じます。このことに関して、聖書は明確に否定しています。

「それでは、どういうことになりますか。律法は罪なのでしょうか。絶対にそんなことはありません。ただ、律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。律法が、「むさぼってはならない。」と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう。」(ローマ 7:7)

律法そのものが罪なのではなく、律法をどういう目的で使うかが問題であるということです。罪を知るためのものである律法を、人の価値をはかる物差しに使うから怒りが生じるのです。律法とは自分の罪に気づくための物差しです。自分の罪に気づくのは、神の治療を受けるためです。もし自分が罪人だと気づかなければ、神に罪を赦してもらおうとは思いません。だから、律法は「キリストに導く養育係」と言われます。その律法を、人の価値を判断する物差しにしていることが問題であり、律法が悪いわけではないのです。

このように間違った使い方をすることを、聖書は「罪の律法」と呼んでいます。

「私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。」
(ローマ 7:23)

神の律法は、私たちが神に導こうとします。それを私たちは罪の律法にしてしまっているのです。

「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」(ローマ 7:24)

私たちはこの世界で律法に仕えて生きています。つまり、この世界にあるさまざまな行いの規定を守ろうとし、守れる人を「偉い人」、できない人を「ダメな人」と判断して生きています。「一番にならなければならない」という律法を持っている人は、一番の人を見て「偉い」と判断し、自分がそうでなければ「私はダメだ」と思います。「東大は価値がある大学だ」と思っている人は、東大卒の人を見て「偉い」と判断し、そうでない自分は「ダメだ」と思うのです。

その他にも、この世の中には多くの律法が存在し、私たちはたくさんの「～ねばならない」を持っています。問題は、それを物差しにして人の価値を判断することです。「素晴らしい」「ダメだ」という基準にしているばかりではなく、律法に違反する人を差別したり怒りを覚えたりすることで、律法によって自分を苦しめているのです。

これは、裏を返すと「行いによってほうびを手にしよう」としているということです。私

私たちは幼い時から、親の律法をクリアして「ほめられる」という「ほうび」を得る経験を重ねてきました。このような仕組みを律法主義と言います。

私たちは、生まれた時から自然とこの「律法主義」の考え方が身についているので、神との関係も同じように考えてしまいます。多くの人が一生懸命頑張って徳を積んだら、神からほうびとして永遠のいのちがもらえるのだと思っていますが、そうではなく、神の恵みはただ受け取ればよいものです。ただ受け取るだけで、誰でも永遠のいのちと罪の赦しをもらうことができます。

それは、イエス・キリストが律法主義を終わらせたからです。

「キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。」

(ローマ 10:4)

人は行いによって義と認められるのではなく、ただ受け取るだけで誰もが救われます。これがプロテスタントの掲げた救いの柱です。

多くの人が律法主義に縛られ、「行いによって救われる」という思い込みにしばられていたため、「律法に仕えているからあなたは苦しんでいるのだ。」と、神はパウロを通して徹底的に戦われました。

私たちが苦しめているのは律法ですが、律法が悪いわけではなく、律法を通して愛されようとしたり、人の価値を判断したりするところに問題があるのです。律法をそのように使ってはいけません。

律法とは健康診断のようなものです。診断の結果、「ダメじゃないか」とさばくためのものではなく、「ここに気をつけよう」「もっと健康になろう」とするためのものです。

■なぜ人は律法に仕えるのか

本来自分の罪を知って神の赦しを受け取るための律法が、なぜ人の価値をはかるために使われるようになってしまったのでしょうか。

それは、人がありのままの自分では愛されないと思っているからです。そこで、人から愛されるために律法を使うようになったのです。なぜ「ありのままでは愛されない」と思うようになったのでしょうか。

「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」

(I コリント 12:27)

私たちは神と一つに結ばれた関係として造られました。神は人をご自身に似せて造り、ご自分のいのちを分け与えて、人のいのちとなさったのです。私たちはキリストのからだの一部であり、神の神殿でもあると聖書は表しています。神の体の器官である私たちは、神につながっていなければ機能することはできません。神はご自分の体の一部として私たちを完全に受け入れておられます。ところが、アダムの罪によって死が入り込み、神との結びつきを

失った人間には今、それが見えません。「死」とは、神との結びつきがない状態のことです。救われて神とのつながりを回復した後も、体は神と離れた状態にあるため、私たちは今も死の体を持っています。そのため、神のことばがわからず、自分が無条件で受け入れられ、愛されていることが認識できないでいるのです。

愛されていることがわからなくなった魂は、本来神の愛を知っているので、「愛されたい」という願望を持つようになりました。また、死の体になってしまったがゆえに、「生きたい」という願望も生まれました。これらの願望によって、「愛されるためにはどうしたらいいか」「生きるためにはどうすればいいか」と求めた結果、相手の願いを満たしたり、称賛を得たりすることで、「〇〇すれば愛される」という律法が生まれ、「生きたい」という願望に対しては、生きるために必要なものを得るために金銭を欲するようになったのです。

人類で最初に律法によって愛されようと試みたのはアダムとエバです。二人は神とのつながりを失った瞬間、いちじくの葉で腰の覆いを作りました。そうすることで愛されようとしたのです。自分の罪が指摘されると、「自分は悪くない」と言い訳をすることで愛されようしました。そうやって私たちは愛されるためには〇〇しなければならないと、律法に仕えるものになったのです。やがて律法は怒りを引き起こし、アダムの子カインは弟アベルを殺すに至りました。

「死のとげは罪であり、罪の力は律法です。」(I コリント 15:56)

人は、神との結びつきを失ったことによって律法に仕えるものになりました。そして、律法によって「罪の力」が開花してしまったのです。その罪はもともと「死のとげ」すなわち「神との結びつきがない状態によって生じた『愛されたい』という思い」によって生じたものです。

私たちが苦しめているもの、それは表面的には律法です。しかし、なぜ律法に従うのか、それは「愛されたい」という願望のためであり、その願望を持つのは神との結びつきを失ったためなのです。つまり、私たちが苦しめているものは「死」なのです。

「死のとげは罪」とは、決して罪の罰は死だという意味ではありません。パウロが「とげ」と表現するのは「病気」のことです。パウロは自分自身の病についても「とげ」と呼んでいます。また、この御言葉のもととなるホセア書も病気を「とげ」と表しています。つまり、神との関わりを失ったことによる病気が罪であり、病気があなたを律法に仕えさせてしまっているのです。

■解決の方法

現実にあなたを苦しめているものは律法ですから、律法を捨て去るためには、「愛されたい」という願望を解決する必要があります。この問題を解決するために、神は次のように教えておられます。

1. 神との関係を回復する

このことを「救い」と言います。ただ信じれば誰でも神の救いを受け取ることができます。

2. 無条件で愛されている自分を知る

律法に仕えてしまう原因は、無条件で愛されていることがわからないからです。神があなたを無条件で愛していることを受け取りましょう。

3. 罪に気づく

神があなたに自分の罪に気づかせようとするのは、どれほどあなたを愛しているかに気づかせるためです。あなたはあなたのままで愛されています。どんなにひどい罪を犯したとしても、神はあなたを愛し、赦して下さいます。「それでもあなたを愛している」という神の愛を知ること、不安や恐れを締め出すことができるからです。

私たちの問題は、無条件で愛されていることをどこまで知ることができるかということです。律法で人から愛されるために生きようとするをやめ、自分でない自分を生きようとするをやめるなら、あなたは本当の自分自身に戻ることができます。何か別のものになるのではなく、それこそが、あなたが変わる道です。愛されようとして他のものになろうと背伸びをするため、疲れてしまうのです。あなたは自分のままで愛されていることに、どこまで気づくことができるでしょうか。ダビデもペテロも人々の前に自分の罪を告白することができたのは、罪を通して、それでも神は私を愛し私を赦してくれたと知ったからです。こうして彼らは、本当の自分を生きることができるようになったのです。神はあなたが好きであなたを愛しておられます。あなたが目指さなくてはいけない自分とは本来の自分です。そして、あなたが止めなければいけないのは、人と比べて何者かになろうとすることです。

私たちはやがて死の体を葬り去り、御霊の体に代えられて生きる時がやってきます。私たちが肉体の死を迎える時、それが終わりの日です。この時私たちは死の体から解放されて、神と直接交わることができます。

「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた。」とするされている、みことばが実現します。「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」(I コリント 15:52-55)

私たちの問題の解決のために、神が用意した福音は、私たちを救い、私たちの中から恐れ・不安を取り除き、愛していることを教える福音です。私たちは必ず天国に移り、死の体から解放される時が来ます。これを信仰で受け止める時、律法に仕えるのではなく、御霊に仕える生きかたに変えられ、苦しみから解き放たれるのです。このことを目指し、私たちを苦しめる律法を捨て去り、神の方向に向かって生きていきましょう。